

台湾と中国の前途

——謝長廷・趙少康対抗弁論

(解説・訳) 若林 正文

(解説)

ここに訳出したのは、今(1987)年1月15日、台北で行われた、台湾の野党民主進歩党の台北市議会議員謝長廷氏(同党中央常務委員)と国民党の立法委員趙少康氏の「台湾と中国の前途」と題する公開対抗弁論会の内容である。後で触れるように、謝、趙両氏は、弁論会の前月行われたばかりの、台湾政治史上初の複数政党選挙である立法委員選挙キャンペーンのいわばスター、主役(少なくとも台北市においては)であった。その主役どおしが、それまで最もセンシティブとされていた台湾の前途問題、いわゆる「統独問題」をおおっぴらに議論しあった討論会として注目された。それまでのように、反対勢力(かつての「党外」、現在の民進党)が発禁覚悟で筆にし、選挙や演説会で言いっぱなしにするのではなく、国民党がわの国会議員が受けてたち、実況放送はさすがに行われなかったものの、ニュースカメラは会場に入り、討論テキスト前文は削除なしで報道されたところに、昨年秋の民進党結成以後の台湾の自由化の波の一端を見ることができる。趙少康氏は弁論の中で「われわれが眼にしているのは、もはやいかなる政治タブーもなくなった時代」だと言っているが、この公開対抗弁論会と、そののちに展開された民進党による「二二八事件」(1947年に発生した反国民党暴動事件)記念・犠牲者追悼活動を国民党が容認したことで、戒厳令の正式解除(7月15日に実現)を待たず、台湾はまさに言論面では「いかなる政治タブーもなくなった時代」に突入しつつあるといえよう。

謝長廷氏は、今年41歳、民進党中堅政治家の一

人である。台湾大学法律系卒業後京都大学法学部に留学、修士号を取得、博士課程を終了したが、ご他聞に漏れず日本の大学院は博士号取得に時間がかかるので、台湾に戻り台北で弁護士を開業した。そして、1979年12月、当時の反国民党勢力、雑誌『美麗島』に結集した党外勢力が官憲と衝突した高雄事件が発生すると、尤清氏(現民進党中央常務委員、立法委員)、張俊雄氏(現民進党中央執行委員、立法委員)等とともに『美麗島』側の弁護士として活躍、81年の地方公職選挙で台北市議会議員(台北市は高雄市とともに行政院直轄市であり、行政単位としては台湾省と同格であり、従って同市議会議員も省議員と同格である)に立候補して当選、政治の世界に入った。85年地方公職選挙で再選を果たし、前述の86年末立法委員選挙で台北市で立候補、前人気、選挙戦中の勢いともに上々で当選確実と見られていたが、そこは組織が弱く票割りの出来ない、できたばかりの反対党の悲しさ、支持者の票の多くが謝氏当選確実と見て、前回落選して再起をはかる康寧祥氏に流れて、次点で落選のうきめを見た。

謝氏は、また党外——民進党の理論家としても知られ、82年には、新規政党結成禁止を打破するための「柔性政党」結成を提唱、86年の民進党結成の準備過程でも重要な役割を果たした。周知のように、民進党の主張として、その綱領にもられた、所謂「自決」論、即ち「台湾の前途は台湾全体住民により決定せられなければならない」が最もよく知られ、同党の国際的符牒のようになってるのが現状である。この対抗弁論会が注目を集めたこともあってか、その翌月民進党がアメリカ、日本に訪問団を派遣した際には、謝長廷氏が「自

決」問題のスポークスマンを務めた（本誌87年4月号「台湾の新野党・民主進歩党は語る」参照）。同氏のこの弁論会での主張や、それに示されたものの考えかた、感覚は、一部の統一を否定しない人々や急進的独立論者を除く、民進党の公約数的主張、感覚を代表しているものと見てよい。

一方、趙少康氏は、台湾育ちの外省人で、今年36歳。党内改革派の旗幟を鮮明にした国民党若手の旗手の一人である。米国留学帰国後、テレビ番組のキャスターで人気を得、81年地方公職選挙で国民党公認を獲得、謝氏と同時に台北市議会議員に当選、85年再選を果たしたあと、これまた謝氏と同様、台北市から立法委員に立候補、選挙戦中は、先鋭な改革議論を吐いて人気を博し、「統独問題」を除けば、その政府批判は民進党候補よりも厳しいところがあったと言われる。謝長廷と激しいつばぜりあいを演じ、選挙戦中、謝氏が趙氏に公開対抗弁論を呼び掛け、趙氏もこれに応じたものの、「公職選挙罷免法」に選挙期間中の公開弁論を禁止する規定があるため、実行は選挙後と約束されていたものが、1月15日早速実行されたのである。選挙の結果は、謝長廷氏はさきに述べたような事情で落選、一方趙少康氏は台北市の最高票で当選を果たした。謝氏は、市議会時代からのライバルの当選を「ついに君を市議会から追い払ったよ」というユーモアで祝福したと言われる。

ところで、趙少康氏の政治的属性を説明する鍵は、氏が国民党内の「愛盟」派である、という点であろう。「愛盟」とは、70年代在米留学生が結成した「反共愛国連盟」のこと。70年代初めの米国の台湾出身留学生の間には、釣魚島（尖閣列島）問題をきっかけに中国大陆に「認同」(identification)する「統運」「復帰祖国」の運動が生まれ、その一方これに対抗する国民党に忠誠な学生による「愛盟」が生まれた。メンバーの中心は外省人子弟だが、本省人子弟もはいっている。かれらの多くは学成って帰国後、大学や政府機関の中級幹部

として新しいテクノクラート層を形成、さらに80年代に入り、選挙を通じて政治的に台頭してきた。例を挙げれば、その筆頭に、台北市国民党党部主任、ついで台湾省党部主任として、83年以降増大する党外勢力の挑戦を受けた選挙の全てを第一線で指揮してきた関中（現行政院青年輔導委员会主任）、趙少康氏を初めとして、そのもとで好成績をおさめた郁慕明（台北市議会議員）、林玉祥（現立法委員）、簡又新（現立法委員）、劉樹錚（台北市議会議員）、洪昭男（立法委員、本省人）など、である。

「愛盟」派の多くは、国民党の中・下級官僚の子弟である。ということは、一方で陳履安（陳誠前副総統の息子。現国家科学委员会主任、党中央常務委員）、宋楚愈（宋達元国防次官の息子。現党中央文化工作会主任）、鄭心雄（軍統のボスだった鄭介民の息子。現党中央海外工作会主任）らの、いわゆる「権貴子弟」のように、いきなり権力中枢に入り込めるような背景を持っていないが、かれらよりは台湾社会そのものを理解し接触出来る、ということである。80年代にはいり、国民党政権がよりいっそう選挙を通じた正統性の確保に意を用いざるをえなくなってきた時、新しい時代に即応し選挙に打ってでれる、党に忠誠で、しかも台湾社会に親近性をもち、留学経験による開明イメージも出せる、「愛盟」分子はたいへん有用であったと言えよう（南民「改革動力或未来乱源——談国民党内的『反共愛国連盟派』」、『九十年代』87年2月）。コネその他の伝統的政治資源の相対的に乏しいかれらにとっても、80年代の選挙は、その野心を伸ばすまたとない機会であったといえる。反対勢力が明確に形成されて以後、台湾政治における議会の重要性はますます強まっている。今後に予定されている国会改革の帰趨によっては、またかれらの年齢からいっても、かれらの機会はますます増大していく可能性がある。ということは、かれらが、86年12月の台北市での選挙戦のよ

うに、民進党の前に立ちはだかる敵手のますます中心になってくるかもしれないということだ。

とはいえ、かれらにもジレンマはある。今のところ選挙というゲームはかれらに有利だが、外省人が多いかれらにとって、その有利さにおそかれはやかれ限界が来よう。かれら外省人という限界を越えてさらに選挙における戦線を外省人人口の多い台北市以外に拡大できるかどうか、民進党の、あるいは予想される労働者政党の形成・進出がかれらのその野心を粉碎してしまうかどうか、あるいは蔣経国後の国民党のリーダーシップの構造が党・政府の要職の中に大量にかれらの席を用意することになるかどうか、民主化、そして蔣経国後に備えるここ数年の台湾政治のルールづくりの帰趨にかかっている。

本誌の読者には、民進党——謝長廷氏の「自決」論は、すでに目新しいものではない（前掲87年4月号参照）。とすれば、この弁論会を紹介する意義は、このような国民党のいわば「第三梯隊」にあたる世代の見解が、反対勢力の主張と対比される形で提示されているところに求められよう。若干先回りしたコメントを許していただければ、『読売新聞』の戸張記者が先の選挙後にいち早く趙少康氏にインタビューして指摘していることだが、趙少康氏の「自決」反対論の現実性が最も気になるところである。戸張記者のインタビューでもそうであったが、趙氏は決して「台湾は中国の一部」といった公式論は言わない。「台湾独立」は非現実的だというのみである。この弁論会でも、中国国民党統治下40年の実績を盛んに誇りながら、それを「自決」というような不確かな冒険にさらしていいのか、と問いかけるのみである。台湾のこの40年の実績を国民党の成績に帰す言い方は、国民党が80年代選挙の都市部でのターゲットにしている中産階級（大部分は本省人ということになる）の支持を必ずしも得ないかもしれぬが、現在持っているものを冒険にさらしていいのか、とい

う訴えは、選挙では民進党候補に入れるかも知れない中産階級でも心中無視できない所であろう。

「自決」論にはもちろん、国民党版の統一政策が「ひとつの中国」を建前にしつつ、奇形的政治制度の正当化、それを通じた外省人の政治的既得権益の擁護、そして本省人政治運動弾圧の口実となってきたことへの批判がこめられている。趙少康氏はそれを、現状の生活を破壊するスローガンだとのレッテルを付けて、豊かな社会をエンジョイし始めた都市中産階級の胸のうちに打ち込もうとしているわけである。

とはいえ、このことは裏返していえば、実は中国大陆との分離の現状のイムプリシットな肯定であり、そのような状況にある「1900万人民」への「認同」の表明でもある。忠誠な国民党員であっても選挙の票中に政治生命のかかっている趙少康氏としては、これから離れることは出来ないし、台湾育ちの外省人第二世代としてはそんなに無理なことでもない。一読してお気付きいただけたと思うが、趙氏の演説の中の「われわれ」は、ほとんどが「中国」ではなくて「台湾」に引照されたものである。趙氏の議論は全体として謝長廷氏という「新台湾意識」に裏返し表現でこれに呼応しているといえよう。

最近、論者のいうところによれば、中国共産党は、台湾情勢について「四合一」を警戒している、といわれる。「四」とは、米、日、国民党、台湾人である。「一」とは実質的台湾独立、つまり台湾海峡現状の長期的維持＝固定化である。論者のいうところがまとはずれでなければ、この弁論会も中共台湾問題関係者の苛立ちの根源のひとつになったのかもしれない。

台湾の「祖国」への「統一」を優先順位の高い政治課題にしてしまったのは、鄧小平である。その背景には「文革」を経た中国共産党の威信の低下、社会主義イデオロギーの魅力の低下、「愛国主義」でもって海外在住中国人の資本、技術、人

材を活用しなければならない「四つの現代化」の現実的要請などがある。一方、「中華民国の台湾化」の引き金を引き、「新台湾意識」に基盤の如きものを与えてしまったのは、蔣経国である。その背景には、「中国の正統政権」の神話が国際的に否認された後の政権生き残りのための、避けることの出来ない自己調整の要請がある。ともに、それぞれ自己のやむをえぬ事情のために、一方は他方をかかえこもうとし、他方は必死ににげきろうとしている。鄧小平、蔣経国に代表される、国共のしぶとい「革命世代」のジェロントクラシーは、あと数年で終わろうとしている。その後の台湾海峡兩岸関係には、どんな展望が開けるのだろうか。

今年の7月27日、12人の台湾地方長老と懇談した蔣経国は、「台湾に40年暮らした。私ももう台湾人だ」と述べた。これを受けて趙少康氏も週間誌のインタビューの中で「外省人、本省人を問わず台湾でともに生存発展を求める人という意味なら、私も台湾人だ」と言っている（『新新聞周刊』1987年8月3～9日号）。この公開弁論会での謝長廷氏の「新台湾意識」の提唱は、趙少康氏のみならず、蔣経国総統（兼国民党首席）までもとどいたクリーン・ヒットだったと言えるかもしれない。とはいえ、この夏の民進党は、出獄してきたかつての「党外」の大物と現執行部との「伝統的」

な勢力争いに加えて、王義雄氏（民進党中央中央評議委員、高雄市選出立法委員）の労働者政党結成宣言の衝撃にみまわれている。すでに工業化された社会で権威主義的政治体制の自由化が進む時、その帰趨を左右する勢力として労働者階級が一躍重要になってくることは、韓国の例を見るまでもなく、明白なことである。労働者の意識の覚醒が、「伝統的」な「統独」の確執の有り方をすぐさま揺さぶっていくことになろう。

戒厳令という拘束服を脱いだ台湾社会の変化には、ますます加速がついている。

*弁論会は、三つの段階に分けて進行した。I. 先ず両氏がそれぞれテーマに関する主張を提示し（主弁論各20分）、II. ついで両氏および主催者（『聯合月刊』社。同誌は台湾の二大新聞の『聯合報』が出している総合誌）が指定した討論者と両氏の質疑応答、そして最後に、III. これらを受けて、両氏が総括討論を行った（結論各10分）。ここでは、II. は煩瑣にわたるので、I. とIII. のみを訳出した。討論のテキストは、『聯合月刊』にも掲載されたが、ここでは陳方崑氏（京都大学博士課程）が、弁論会のビデオ・テープから直接おこした中国語テキストを使用させていただいた。陳氏に謝意を表する。訳文中〔 〕内は訳注である。

I. 主弁論（各20分）

<謝長廷>

御来場の、台湾問題に関心を抱いておられる皆さん！ 今日には謝長廷と趙少康の弁論会です。今しがた私が入って来る時、私に私の母語台湾語で発言するようにいう人がいました。しかし、今日私達はひとつの理念を伝達しようとしているのですから、その効果を上げるために、われわれの共通の言語、つまり趙少康氏の母語で発言します。

次の機会には、趙少康氏が、私の母語台湾語で発言されるように希望します。

台湾問題と中国の前途問題をどう解決すべきか、内外にたくさんの意見があります。この弁論会の焦点をいっそうはっきりさせるために、私は私の支持する見解、反対する見解、そして私の疑問を明確に提出したいと思います。

第一に、私は、統一の為に統一を求めるようないかなる提案にも反対であります。ひとつの国家が作られるのは、人民の幸福、安全そして尊厳の

ためであって、統一は国家の最高の価値でも目的でもありません、統一は手段にすぎません。統一のための統一であれば、統一することと統一されることの区別がつきません。つまり、統一がわれわれの最高の価値であり、いかなる代価をはらっても達成されねばならないとしたら、われわれが今日台湾で努力し、奮闘していることの価値はなくなってしまう。だから、統一は手段であって、目的ではありません。

第二に、私は、三民主義で中国を統一する（「三民主義統一中国」）という統一方式と政策に反対です。この点については、後で趙少康氏に「三民主義統一中国」に賛成するかどうか、はっきりと述べてもらいたいと思います。「三民主義統一中国」というのは、目下台湾の政治を支配している執政党〔国民党〕が、1981年に提起した大陸政策です。しかし、この政策は一言一句論議を呼んでいます。例えば、「三民主義」ですが、いったいどの版の「三民主義」を言うのでしょうか。台湾にはいくつもの異なった「三民主義」の注釈がありますが、いったいどの注釈を基準にするのでしょうか。台湾にはたくさんの解釈がありますから、孫中山先生が生きておられたら、たいへん面食らうのじゃないでしょうか。

ですから、「三民主義統一中国」といっても、大陸でどの程度まで実行したら「三民主義」と言えるのでしょうか。例えば、大陸で私有財産制度をやったら、「三民主義」を実行していることになるのでしょうか。あるいは、自由経済体制を実行しなければ、だめでしょうか。それとも、私有財産と自由経済体制を同時に実行しないといけないのでしょうか。実際諸説紛々で、きまった解釈はありません。

次に、「三民主義」が双方で本当に実施されたとすると、それは、「両国一制」に過ぎません、どうやって統一するのでしょうか。大陸と台湾の双方が「三民主義」を実行しているとして、どう

やって双方の政権を統一するのか——交渉するのか、接触するのか、それとも、戦争で決めるのか、妥協するのか、憲法会議といったものでも開くのか。あとで、趙議員にこの点についてかれの見解を示して頂きたい。

このように、「三民主義統一中国」は、方法と順序を欠いています。どの程度まで準備したら統一にかかるのか、どのような方式でやるのか、統一した後どんな問題を解決しなければいけないのか、全く考えられていない、何もないのです。だから、私は断定したい、「三民主義統一中国」というのは政策などというものではない。実際それは統一戦線戦術のスローカンにすぎないのです。

ですから、同様に、わたしたちは、中共政権の提出している〔葉剣英の〕「九項目提案」や台湾の祖国復帰というような各種の提案にも反対です。というのは、これらの提案の最大の欠点は、国民党が台湾で提出している大陸政策と同様、台湾人の存在を無視している、台湾の1900万の住民を無視している。かれらは、中国統一ということを国民党と共産党の両党の事柄としてしまい、台湾の1900万の住民の願望こそが最高の願望であるべきことを忘れてしまっている。かれらは、統一が手段にすぎないことを忘れてしまっている。どのようにしたら台湾の1900万の住民の願望が尊重できるのか、どのようにしたらこの1900万の住民の幸福、安全、尊厳を増進できるのか、かれらは全く無視してしまっています。ですから、台湾海峡兩岸で提出されている統一政策は、突き詰めて一言で言えば、実際上は国共両党の政権争奪にすぎません。国共両党が政権という目的の為に各種の方式を作っているのであって、われわれ国家の主人である人民の為に政策を定めているのではありません。だから、このような政策にはわたしは反対なのです。

次に、第三点。台湾問題の解決には、われわれの政府が一つの主権国家としての国格を追及する

よう要求しなければなりません。というのは、台湾がひとつの強力な国家としてシンガポールやイスラエルと同様に世界各国に重視されるためには、その大前提として主権国家の地位が必要です。今日の台湾に問題が発生し、国際的にはうだつが上がらず、多くの政策が次々と失敗していく、そのそもその根源は主権国家としての国格を失っているからです。一旦主権国家の国格を失ってしまえば、国際社会において独立の国格がなくなれば、台湾の問題は「中国の」内政問題になってしまいます、台湾の問題は国際問題となることができません。ですから、今日国民党政府が、硬直した外交政策、手段でもって失敗に失敗を重ねているのは、「統一」政策において誤っているからです。国民党は、一方で自分は大陸をも代表していると言い続け、同時に国際社会がわれわれを支持してくれるよう求めています。しかし、これは矛盾しています。かつての伝統的な中国においては、正統であるかないかは、中国自身が承認し認めればよかった。しかし、今日の国際社会では、正統とはいっても、それはわれわれ自身が認定するのではなくて、国際社会が、国際組織が認定するものです。ですから、今日われわれが中国大陆も代表しているという主張は明白に国際社会で大きな困難に遭遇しているのです。単刀直入に言って、われわれが国際社会に再復帰しようとする際に、われわれが大陸を代表出来ない、或いは代表しない、と条件がつけられた時、われわれはこれを受け入れるべきなのかどうか。もしわれわれが国際組織に加入しようという時、われわれは大陸は代表できず台湾を代表出来るだけだと条件がつけられた時、われわれはこれを受け入れるべきなのかどうか。これこそが、われわれ台湾1900万人民の生存、安全、尊厳とわれわれの国家的尊厳と国格がかかった重大問題であります。しかし、残念なことにこれらの問題についてわれわれは十分な発言のチャネルを持っていません。われわれ住民全体の願望

は、政府の政策決定に影響することができないのです。ですから、わたしはここでひとつの主権国家の地位の獲得を目指す全ての努力を支持する、と声明したいのです。

次に、第四点です。わたしは、台湾住民自決の主張は、今日の台湾が生存を求め、発展を求める最も有力な主張であると考えます。今われわれの台湾は国際社会で主権国家の地位を喪失しています。われわれ台湾の問題を国際問題とし、それにより台湾の安全を高めるには、台湾住民全体の自決の道しかないと考えます。つまり、台湾の前途は、1900万の台湾住民によって決定されるべきであり、いかなる強権によっても、また国共両党によって決定されるのであってもなりません。また、長年非改選のあの老議員たちがわれわれに代わって決定すべきでもありません。わたしは、このような台湾住民自決という主張を支持することをはっきりと申し述べて置きます。

第五に、わたしは、新しい台湾意識を打ち立てることを支持します。今日われわれは長期にわたる国共の対峙の結果、中共政権の強大な威嚇と圧力に直面しています。こうした状況の中で、台湾の全ての住民には台湾島運命共同体というような台湾意識がおのずと形成されてきています。これはたいへん自然な現象です。このような台湾意識は、本省人外省人を問わず、国民党までも含んだ新しい台湾意識です。われわれ全体同胞が、この地において互いに融合し一体となっていく新しい意識です。これは伝統的な古い台湾意識、古い省籍意識とは異なるものです。これは、われわれ全体同胞の生存の為の、ひとつの新たな運命共同体の意識、そのための台湾意識なのです。ですから、国民党はこれを敵視すべきではありません。

第六点、これはわたしが述べてきたいいくつかのポイントの延長線にあることですが、わたしは、今日の台湾海峡兩岸の政府、国民党も共産党も、現段階では統一を語る資格を持たないし、互いに

相手を統一する資格を持たないと考えます。というのは、現段階で海峡兩岸の政府が為すべき最優先の課題は、自分のところの人民の生活を改善し、人民の安全、尊厳を増進することではないですか。今や、海峡兩岸のたくさんの青年、学生が、民主を求め、自由を求めています。民主と自由を追い求めるたくさんの人々が、海峡兩岸の政府の圧迫と迫害、弾圧に直面しています。ですから、われわれは今日統一の問題をひとまず脇に置いておくことにしたらどうか。台湾が今最も必要としていること、そして大陸の政権が最も緊急にしなければいけないことは、統一を語ることではないと思います。統一、統一と強調し続けるなら、実際には敵対意識を強め、逆に分離の現状を固定するだけです、台湾海峡の緊張を高め、相互の不安を強めるだけです。現在最も重要なことは、自らの政治を改革し、台湾を更に民主化し、台湾の人民をいっそう団結一体とさせることです。

それから、数多くの人民が必要としていること、要求していることは、統一が未完成だからということをお口に拒絶すべきではありません。例えば、外省籍同胞の多くは親族訪問や墓参り、病気の肉親の看病のために大陸に帰りがたっています。今やかれらが行くのを認めるべきです。まだ統一が完成していないからといって不可とするべきではありません。また、「統一」問題とは関係のない多くの経済交流、文化上の協力などは現在始めてもかまわないはずです。これも統一未完成をお口に拒否すべきではありません。拒否しなければ、われわれは人民の相互交流、相互往来を通じて、相互の信頼を打ち立てていくことが出来ます。わたしは、海峡兩岸の人民は自由な社会においてこそ、かれらの知恵を十二分に発揮することが出来るのだと考えます。民主的制度の下においてこそ、かれらの知恵によって正しい、正確な制度を形成することが出来るのです。台湾が大陸と統一すべきか否か、という問題は、将来の知恵ある人民に

より最後の決定をしてもらえばいいではありませんか。それより以前には、台湾にとっては如何にその安全を守か、統一されてしまうのを防ぐかが最も緊急の問題です。統一されてしまうのを防ぐには、すでに触れたいくつかの点以外に、民主化された社会が必要です。それによって大陸と台湾の民主を追及する人民を団結するのです。

そしてさらに、台湾人民は全世界の平和、民主、進歩を追及する人民と団結出来るはずです。団結出来るならば、われわれは台湾問題を世界の問題の一部とすることが出来ます。われわれは、台湾が世界の進歩的運動の一環を形成するよう努力すべきです。台湾に問題が発生しても、われわれは各国の政府に援助を求めることは出来ませんが、各国の民間の進歩勢力の力をあてにすることは出来るでしょう。台湾が民主を実行しさえすれば、今民進党が努力しているように、台湾人民が不断に民主運動を推進してさえいけば、将来台湾に危機が訪れ外来の侵略のおそれがある時、台湾の問題は各国の民間の進歩勢力の支持をうけることが出来るのです。各国民間の進歩勢力の支持はかれらの政府の政策に影響するでしょう。少なくともわたし個人は、かれらがかれらの政府に対して台湾問題の平和解決を要求してくれると考えます。この点もわたしが強調したい点であります。

あと、3分の時間があります。あとで趙少康議員もいろいろと問題を提出すると思いますが、わたしもここで、かれにいくつかの問題を提出しておきたい。

第一に、わたしが先に触れたように、「三民主義統一中国」の政策を趙少康氏は支持するのか、反対するのか。

第二に、かれがもしこの政策に賛成するのなら、どのように統一するのか。どのような方法で統一するのか。趙議員はわれわれに説明すべきであります。

第三に、統一は最高の価値であり目的であるの

かどうか。わたしのこの点に関する考えかたを趙少康議員はどう考えるか。趙議員はかつて別のところで民主でもって中国を統一するといっているが、しかし、双方が民主を実行していても、分離している、「両国一制」と言うこともあるわけです。ですから、いったいどうやって統一するのだろうか。交渉しない、接触しない、妥協しない[という「三不政策」]でもって、また、戦争もしないで、二つの政権をどうやって一つにするのでしょうか。趙少康氏はこの「三不政策」というものをどう考えているのでしょうか。

最後に、趙議員は弾力外交というものを支持していると思いますが、では、どの程度までの弾力的であっていいと考えているのでしょうか。もしわれわれが国号を変え、国歌を変え、国旗を変えたら国際社会に入れるとしたら、趙議員は同意するでしょうか。もしわれわれが大陸に対する主権の主張を放棄すれば国際連合のような組織に入れるとしたなら、趙議員、あなたはどうしますか。思うに、これらの問題こそがわれわれの間の争点であろうと思います。

皆さんどうもありがとう。

<趙少康>

司会の沈君山先生、謝長廷議員、御列席の皆さん。

中国と台湾の前途の問題について、わたしは謹んでこう主張したい——中国の前途は台湾にかかり、台湾の前途は中国にかかり、中国と台湾の前途は共に中国国民党の先鋭な革新にかかっています。

なぜ中国の前途は台湾にかかっていると言えるのでしょうか。われわれ中国人はこの百年来、ずっと安定繁栄した生活を享受できず、戦乱と流浪の苦しみを飽きる程味わってきましたが、この三、四十年来台湾地区の人民のみが安定し繁栄した生活を享受し、なおかつ前途に対して希望にあふれ

ているのです。希望にあふれているからこそ、革新の呼び掛けが非常に高まっているのです。数千年来、中国人民は真に主人となったことはありませんでした。この三、四十年来台湾地区の人民のみが真に民主政治の慶びを享受し、なおかつ、皆さんひとりひとりがそうであるように、倦むことなく前途への希望にあふれているのです。それだからこそ、われわれはもっともっと開明さを求めるのです。最近大陸で学生運動が occurred しましたが、かれらの要求しているのは最も基本的な民主にすぎません。それらをわれわれはすでに持っているのです。

御承知のとおり、中共は世界的強国のひとつと言われています。しかし、同時に世界で最も遅れた国家のひとつともみなされています。西側諸国では中共は巨獣ではあるが、巨人ではないと見ています。ソ連は以前は中共を飼犬と見ていましたが、今では狂犬とみなしています。言葉を換えて言えば、中共はずっと世界の舞台で真に重要な地位というものを獲得できていないのです。今日中国が真に国際的地位を享受しようとするなら、政治において経済において、社会、文化、教育など各方面において各国と肩を並べなければなりません。ところが、これらの条件を台湾地区は既に備えていますし、なおかつ引き続き自身の財産を増やしつづけます。

台湾海峡の兩岸の、片方は三民主義を実施し、片方は共産主義を実行していますが、40年という時間を経て、勝負は既に明らかです。共産主義が中国にもたらしたのは果てし無い災禍であったことは、すでにはっきりしています。ですから、これは謝さんの問題に答えることになりますが、中国の今日の問題というのは共産主義と三民主義の問題、つまりは民主と共産の問題、生活方式の問題、経済制度の問題であります。これは今日の中国人にとって避けて通れない、逃げることの出来ない選択の問題であります。われわれには第三の

道はありません。さらにいえば、知識分子は我において誰が歴史に責任を負うのかという抱負を持つべきである、と思うのです。そこで、謝長廷さんにお答えしますが、「三民主義統一中国」というのは一つの政治的呼び掛けです。反共がわれわれの政策であり、民主がわれわれの政策です。この点について疑いをもつ人はいないだろうと思います。われわれの生活方式、経済制度を大陸にも広げていく、こうしてこそわれわれには素晴らしい前途が待っているのです。

次に、何故台湾の前途は中国にかかっているのか、についてお話しします。今さっき、わたしは中国の前途は台湾にかかっていると申しました。この台湾というところは、土地は狭く人工は稠密です。天然資源はほとんど無く、あるものといったら、わずかばかりのセメント、石灰石、あるいはしばしば事故のおこる炭鉱のみです。こういう困難な状況のもとで、天然資源が欠乏している状況のもとで、ここまでの局面にするのは、実に、「創業の艱難」そのものでありました。よく「創業は難く、守成は更に難い」と言います。こんなに小さな地域が更に成長を続けようとするなら、道はただひとつ、外にむかって発展するしかありません。外にむかって発展するには、皆さんおわかりのように、中国大陆は台湾に最も近く、また最大の市場でもあります。もし中国が一旦統一するならば、人材が外に流出するということはありません。近きを捨てて遠きを求めるということはありませんからです。台湾の人材、資金、技術、そして経済はどれも中国大陆がたいへん必要としているものです。ですから、中国大陆と台湾が統一して以後、初めて台湾は大いに力を発揮できるのです。現在外国がわれわれに圧力をかけて、経済制裁をとなえています。このままでいったらどうということになるのか、誰もわかりません。

台湾の1900万住民のその第一世代は、皆大陸からやってきました。台湾にやってきた時間の早い

遅いがあるだけです。ですから、われわれ台湾地区の人民の血の中には開拓者の血が流れています。だからわれわれ台湾地区の人間の生命力は特別に旺盛なのです、われわれの開拓欲は強烈なのです。われわれの商人は、全世界に、ナイジェリアからアフリカの隅々まで出掛けていっています。何と弾力性に富み、活力に溢れていることでしょうか。

大陸の政治、経済、文化、社会、教育はまだ未開拓とっていいでしょう。どれも皆われわれ開拓者の血の流れている台湾地区の人民の開拓を待っています。「楚は三戸なれども、秦を亡ぼすは必ずや楚」と言います。思いおこせば、国父が三民主義によって満清を倒した辛亥革命、先の総統蔣介石先生の北伐、また今日の小康、中興の局面、これらは皆、われわれが正義の立場に立ちさえすれば、邪悪な勢力は恐れるに足りないということを証明しています。われわれはこの上どうして、今さっき謝議員がいったように、自らを軽く見、自ら敷居を高くし、自ら美しき楽土を素晴らしい前途を放棄する必要がどこにあるのでしょうか。

親愛なる友人の皆さん、今日の世界にはもはや桃源郷はありません。この数百年来、中国人民が次々と台湾地区にやってきたのは、戦禍を避ける為であり、当時の環境に不満を抱いたからでありました。しかし、この数百年来、台湾にやって来た人民はそれでも戦禍を避けることはできませんでした。まずオランダ、スペイン、日本、そして今日にいたるもなお中共の脅威を受けています。ですから、友人の皆さん、考えてみて下さい、台湾はこの世界から逃れて独立するということは出来ないのです。

先ほど、謝議員は台湾独立の問題を提出しましたが、わたしは断固として反対です。共産党を恐れるから独立したい、台湾が独立した主権を有する国家になりさえすれば国際社会に復帰できる、世界の支持を受けることが出来る——これらは実際のところ、一方的な思い込みにすぎません。こ

ういう考え方は台湾を後戻りの効かない危険なところに引きずりこんでしまいます。これは一つの理論だ、数ある理論のひとつだとは言えるかも知れません。しかし、われわれは1900万人の前途を、家庭、財産、生命を理論の実験に供することは出来ません。政治は物理学でも化学でもありません、実験を間違えたからといって再度実験するということは出来ないのです。少なくとも、過去三、四十年の事実は、台湾地区の人民は五千年来最も幸福で最も繁栄し最も楽しんでる人民であります。この偉大な成績は、少数者の雙言半句で否定できるものではありません。どんなに否定したところで、偉大な成績はそこにあるのです。

もしかしたら、台湾独立を云うのは共産党を恐れるからかも知れません。しかし、共産党を恐れる結果は、戦禍をまねくかも知れません。住民自決ということが、たいへん曖昧ですが台湾独立ということを行っているのだとすれば、わたしはここで再度反対を表明しておきたい。先ほど申しましたように、政治家と云うものは遠くを見通し胸襟を大きく開き、なおかつ抱負を持つべきであります。自分一個の利益の為に少数の民衆に迎合して、その歴史に対する責任を放棄してはなりません、政治家としての知恵と責任を放棄してはならないのです。

友人の皆さん、三、四十年という時間は歴史の上ではたいへん短いものです。三、四百年でも歴史の上ではとるに足りません。しっかりした節操をもつ政治家というものは、目の前の利益を追ってはなりません。われわれのこの1900万人で10億人の重荷を背負うのは、たいへんなことです。しかし、たとえわれわれが心を鬼にして臍の緒を切ってしまったとしても、腹の皮の上に臍の緒の跡は残るのです。今日独立したからといって自分が中国人でないと言えるのでしょうか。独立した後、自分たちの文化、思考様式が変わるとでもいうのでしょうか。変わりはありません。変わりはないの

なら、何故われわれは前途に着眼できないのでしょうか。もっと遠くを見れないのでしょうか。どうしてわれわれは、美しき楽土を素晴らしい前途を自ら放棄する必要があるのでしょうか。

親愛なる友人の皆さん、わたしはもう一度繰り返したい——中国の前途は台湾にかかり、台湾の前途は中国にかかり、中国と台湾の前途は共に中国国民党の先鋭な革新にかかっています。

民国38年〔1949年〕、政府が台湾に移転しましたが、今にも崩れそうでした。民国47年の八二三砲戦〔人民解放軍の金門島馬祖島砲撃〕民国53年の米国援助の停止、皆が台湾は終わりだと言いました。民国60年われわれは国連を脱退しました、民国64年先の総統蔣介石先生が世を去りました、民国67年米国と断交いたしました、そして皆が台湾は終わりだと言いました。しかし、台湾は終わりになったのでしょうか。少数の在米の台独分子は、台湾はもうすぐ終わりだ、ということをかれの政治宣伝の材料にし、国民党政府は腐敗し誤っていると攻撃してきました。しかし、台湾は終わりにならなかったばかりか、挫折にあえばあうほど発奮し、屹立して揺るがなかったのです。

国民党の政府は、過去3、40年の内憂外患のもとにありながら、素晴らしい成績を上げているのです。皆さん、考えてみて下さい、どうしてこれに反対するのでしょうか。わたしは、二つの例を上げてみましょう。

民国35年の台湾の大学卒業生は154人にすぎませんでした。その内女性は2人だけでした。民国40年政府が台湾に移って2年目、台湾の大学卒業生は1052名、内女性は164名だけでした。民国74年になると、大学・専門学校卒業生は9万に達しています。民国40年から74年までに全台湾で887,361名の大学・専門学校卒業生が出たのです。皆さん、あらゆる平等のうち教育の平等は最も重要な平等です。国家の資産のうちで教育ほど大事な資産はありません。

次にわれわれの一人当りの国民所得を見てみましょう。民国40年にはわれわれの一人当りの国民所得は、1,407元、民国74年には、114,355元です。民国70年の価格で換算すると、40年の数字は、15,451元に、74年は、108,695元に相当し、8倍強になっています。われわれの一人当りの国民生産額は、民国40年には1,481元、民国74年には、125,333元です。民国70年の価格で換算すると、8.15倍に成っている勘定です。このような教育上の経済上の達成は、世界でも優れた国家の内に入ります。

では中国大陆はどうでしょうか。大陸の今年の一人当たりの国民所得は300米ドルです。われわれ台湾地区では米ドル換算だと3,750ドルです。西暦2000年には大陸の一人当たり国民所得は800米ドルと予想されていますが、われわれは14,500ドルと予想されています。友人の皆さん、これは何と素晴らしいことでしょうか。このような成績を、党外の友人、民進党の友人は全く否定してしまいます。かれらが肯定的な言葉を言ったのを聞いたことがありません。かれらは、これが労働者を搾取し、人民を搾取したものだと言うのです。わたしは覚えています、何年か前、最初的高速道路ができる時、党外の友人が反対しました。かれらは盛んに高速道路は作るべきではない、それは車を持っている金持ちの為のものだからという理由でした。今日ではかれらは、当時の政府は先の見通しを持たなかった、高速道路を1本しか作らなかった、どうして2本作らないのか、どうしてもっと早くとりかからないのか、と批判するのです。これは両方ともかれらの言葉です。

親愛なる友人の皆さん、台湾の経済的達成はなかなかのものだが、政治の進歩は遅れているという人がたくさんいます。わたしはこれはおかしい言い方だと思います。皆さん、政治が不安定で経済進歩がありうるのでしょうか、そういう国があったら教えて下さい。台湾、韓国、香港、シンガポー

ルはアジアの4匹の小龍と呼ばれています。この4匹の小龍には全く天然資源がありません。一方、フィリピンだとか、マレーシア、インドネシア、タイとかは4匹の小龍より天然資源は豊富です。しかし、政治は不安定で、したがって経済的にも遅れています。米国、日本、西欧は経済がわれわれより発達しているから、政治もわれわれより進んでいます。同様に、アフリカの多くの国家は経済がわれわれよりも遅れているが故に政治もわれわれより遅れているのです。ですから、政治と経済とは並行するものなのです。経済が進んだ程度にしか、政治も進歩しないのです。経済が良く成績があがっているが、政治はダメ、といいますが、それは経済が数量化して言えるからです。今さっきわたしがあげた数字は、だれも否定は出来ません。政治は数量化していえません。だから、ダメだ、ダメだと勝手なことがいえるのです。しかし、これは通りません。

われわれの経済が成功し教育が成功し、社会、政治、経済の全体的条件が成熟してまいりましたので、政府は昨年政党結成の解禁と戒厳令の解除方針を明らかにしました。最近は[中学校生徒の]ヘアースタイルも解禁しました、ダンスパーティーも解禁しました。われわれの議会でさえフレックスタイム制や休暇制に賛成しています。謝議員も[台北市]議会で休暇制を提案したことがあります。30年前だと、休暇を提案するなど考えられぬことでした。今や何故皆が休暇を提案するのでしょうか。条件が変わり状況が変わったからです。政府がかくも大幅に政党結成解禁、戒厳令解除に踏み切っているのに、これに肯定的評価を与えた党外の友人がいたでしょうか。いません。やはり批判しているのです。全世界の自由国家の世論が中国国民党と国民党の執政する政府の民主化への前進を評価している時、民進党の友人たちだけが反対しているのです。わたしには全くわかりません。わたしは謝議員にお教えを請いたい、あなたがた

民進党はといった全体国民党の先鋭なる改革、大幅な進歩というものを歓迎しないのでしょうか。今日これに最も強く反対しているのは、どうもあなたがたのようです。しかし、民進党が反対するからといって、否定するからといって国民党があげた成績は消えはしないのです。

今日民衆の教育程度は高まり、その結果政府に対する要求はますます多くなっていますが、これは国民党の成績なのです。過去5年来、わたしはずっと大幅な政治改革を主張してきました。国民党にもたくさんの欠点があり改革を必要としています。これは皆が知っていることです。しかし、われわれは国民党の成績というものもみてみなければなりません。政治家というものは公平でなければいけないでしょう。

わたしはここで特に声明しておきたい。わたしは個人として健全な反対党にはたいへん賛成である、断固として支持します。

わたしはまた民進党も国民党とともに一緒に革新に乗り出すことを歓迎します。互いの力を消耗しあってはなりません。われわれの現在の国力というものはたいへん貴重なものです。皆が力をあわせて革新すべきであり、そっぽを向き合うべきではありません。そっぽを向き合ったら互いに互いの力をそぐことになります。国民党の革新、政治全体の革新を果たして初めて台湾の前途が語れるのです。そこでわたしは謝議員に伺いたい、台湾の前途のために、あなたがた民進党はといった何をするのか、あなたがたの「牛肉麵」〔政策構想〕を見せてもらいたい、といった「牛肉」〔具体的政策〕はどこにあるのか、あなたがたの政策はといった何なのか。あなたがたは国民党のなからなにまで批判するが、あなたがたのどこが国民党より優れているのか。例を挙げてもらいたい。民進党は民主の名を借りて中央集権を実施している。今回の監察委員選挙では、10人の中央常務委員で政策を決めてしまい、末端の党員の意見はい

ささかも尊重されなかった。このどこが民主政治ですか。われわれ国民党は選挙に際しては少なくとも党員の意見調査を行っています。あなたがたは暴力を主張し、分離主義を主張しています。

親愛なる友人の皆さん、われわれが眼にしているのは、もはやいかなる政治タブーもなくなった時代です。しかし、タブーがなくなったからといって、政治道徳、政治倫理がなくなっていいというわけではありません。民衆の政党政治に対する期待は、正直にいったいへん強いものがあります。しかし、われわれは環境が政党政治全体の成熟をもたらししてくれることを期待します。われわれはわれわれの国家がいっそう民主的になることを希望します。しかし、われわれは、英国では1215年の「マグナ・カルタ」以後、1928年になって初めて女性にも投票権が与えられたこと、米国では民主政治の実施後200年たってやっと時勢に参政権があたえられ、黒人がより大きな民主的権利を享受できるようになったのは、1965年になってのことだ、ということを忘れてはなりません。

台湾で38年にわたり民主憲政を実行し今日の成績を得るに至りました。ですから、われわれはこの成績を大陸にもっていかねばなりません。大陸の政治、経済、文化が引き続き改革され、台湾と並ぶようになれば、双方はおのずから交渉に臨むことができようというものです。その時になれば、交渉していけないという理由がどこにあるのでしょうか。しかし、現在は条件が整っていません。交渉して何を話すのでしょうか。そこで、謝議員におたえしますが、われわれは勿論交渉のテーブルについてもかまわない、しかし、双方の条件がそろっていなければならない。生活方式も同じくならないとなければならない。中国人、海峡兩岸の中国人が団結してこそ、中国は世界の真の強国になれるのです。

ありがとうございました。

II. 質疑応答（略）

III. 結論（各10分）

<謝長廷>

御列席の皆さん、本日の対抗弁論会も最後の段階に来て、いささかはっきりしない問題もありますが、争点は出てきたと思います。

わたしの記憶に間違いがなければ、現在の客観的情勢のもとで、台湾問題を解決し、台湾人民のためにより幸福な、より安全な、より尊厳に満ちた前途を勝ち取るために、われわれは断固として堪え忍び、他国や国際組織がわれわれの中国代表権を認めないなら、われわれはこれに同意しないし参加もしない、というのが、趙少康議員の主張であります。言い換えれば、これは大陸も代表するという立場です。実際には、こういう立場こそが、これまで国際外交上の相次ぐ失敗、深まる孤立の原因となってきたのです。

さきほど、われわれは双方とも、今日の台湾問題は、過去の正統的王朝の交替の観点からは見ることが出来ない、という点で一致しました。かつては、王朝の力が充実すれば、征服したければ征服し、占領したければ占領すればそれでよかったわけですが、今日の国際社会ではそうはいきません。今日の局面では、われわれは自分自身の力の他に、国際法、国際的習慣などの制約を考慮しなければなりません。もし、われわれが中国問題がひとつあるだけだ、つまり、われわれこそが中国を代表する合法政府だ、とのみ考えるなら、これは、われわれ自身の内部で流通させているぶんには構わないが、台湾が自分だけで言っているだけならかまわないが、外には出せない、国際社会には持ち出せないのです。国際社会は、中国を代表する正統政府は、大陸の政権であり、台湾の中華民国ではないと認めています。この現実を重視しなければいけません。これは重要です。自分だけ

内弁慶を誇っていてもなにもなりません。われわれがここで改革に努力しさえすれば、いつの日か大陸に影響を与えることが出来る、大陸を統一することが出来る——わたしはこれは誤っていると考えます。他人がどう言おうと我こそが正統であり、必ずやお前を消滅してやる、というのですから、これこそ中国の伝統的王朝交替の古い観念であります。

さきほど述べましたように、趙議員の議論でもわたしの議論でも、民主の堅持という点では一致しています。しかし、趙議員は、将来民主が実現したら、[大陸と]交渉するということです。だが、これは何時のことになるのでしょうか、趙議員は時間を提起していません。いったいどのくらいかかるのでしょうか。10年、20年、それとも50年、100年でしょうか。かれは説明していません。こういう議論には意味がありません。というのは、この30年なり、50年なりの間、台湾の安全はどうするのですか、台湾は如何にしたら統一されずにいられるのでしょうか。これは、決して「恐共」の議論ではありません、現実的な政治圧力の問題です。趙議員は、われわれの国民所得が2万米ドル、3万米ドルになりさえすれば、統一できるのだと言いますが、そこには何ら必然的関係はありません。もし、われわれが国際社会において永久に一個の地方政府にすぎないのであれば、たとえ5万米ドルの国民所得でも、大陸中共政権の一部にすぎないのです。全ては、全ての努力は無駄ではありませんか、全ての辛苦の成果は大陸政権のものになってしまうではありませんか。国際社会では、われわれはかれらに属するものと見られてしまいます。わたしが主権国家の国格を勝ち取らなければならぬと強調する所以はここにあります。もし主権の地位が勝ち取れないのなら、われわれはさらに自決の手段でもって台湾問題を国際問題の一部分として突出し、われわれの問題が中国の内政問題に止まらず、国際問題なのだという事を世界に

認識させねばなりません。[かくして]われわれはより多くの生存の機会を獲得でき、援助を得る機会を獲得できるのです。

趙議員の言い方の多くにわたしは賛成できません。例えば、かれは台湾の多くの政治改革は国民党による改革だと言いますが、これは全く事実と反しています。かれは、政党結成、ヘアースタイル、ダンスパーティなどの解禁、戒厳令の解除を国民党による改革だとしています。国民党はこれらを発布しただけではありませんか。国民党が自分から改革に踏み切ったわけではありません。これらは、たくさんの民主人士が、『自由中国』事件の雷震とか、『美麗島』事件の受刑者とか、過去に多くの人々が自分たちの自由を青春を、甚だしくは生命を犠牲にして、民主を要求し戒厳令解除を要求し政党禁止を突破しようと努力してきた結果であります。

趙議員は、現在の改革は大幅な改革だと言っていますが、そうでしょうか。大幅な改革というのなら、われわれの社会の力が、例えば30であるところを、70、80の改革を行う、こういうのを真の主導的な改革というべきでしょう。今日国民党が台湾でやっているのは、社会の方から迫りに迫られてしかたなくやっているのであって、すでに30の力が備わっているのに、23、28しかやらない、40の力ができたら、それから32の改革をやる、というものにすぎません。ですから、永遠に社会に緊張をもたらす、余裕をなくしてしまうのです。この責任は他の誰でもなく国民党が最大の責任を負わなくてはなりません。

ここで誤解を避けるために、ひとつはっきりと言っておきたい。わたしは、日本時代に比べて全てが及ばない、などとは言っていません。どの点を比べるかです。政治を比べてみると、政府を批判しただけで、それだけで12年、14年、15年、さらには無期懲役ということが[日本時代に]あったのでしょうか。日本がわれわれを植民地支配した

時、反対人士はつかまるにしても、2、3カ月、あるいは10日、8日といったところがせいぜいで、時に1年に何回も捕まるということがあったのです。国民党になってから、われわれは一回毎にひとりぶんの青春をまるごと、ひとによっては一生の半分を犠牲にしなければなりません。こんなことが誇るに値することでしょうか。

文化、社会、経済などの面で多くの変化があったことはわたしも認めます。でも、必ずしも大きな進歩があったとは言えません。これも観察の角度の問題です。われわれの子供たちの喘息が増えました、近視も増えました、肝炎も増えました——これが進歩でしょうか、公害が進歩でしょうか、犯罪の増加が進歩でしょうか。趙議員の言っていた[役人にものをやってもらうのに必要な]18個の「紅包」[賄賂ないしこころづけの現金をいれる袋]が進歩でしょうか。

今日、台湾の前途は国民党の革新にかかっているわけではありません、人民の民主運動、人民の努力にかかっているのです。今日大陸の民主化に真に影響するのも、国民党ではありません。国民党はかつて[大陸工作のために]たくさんの金を、われわれの税金を使いましたが、いったい全体大陸に影響を与えたのでしょうか。答えはノーです。われわれ民進党が成立すると、大陸には民主運動があり、学生は闘争を起こしています。影響しているのは、われわれであります。

ここでわたしは、趙議員が出している問題に回答しましょう。もう回答したものもあります。趙議員は、民進党は「牛肉麵」を提出して見ろ、と言っています。たいへん結構な要求です。われわれの党の綱領を見てください。われわれは、大陸からやってきた人たちが、肉親を訪問し、病気の親族を見舞い、墓参りするのが認められるべきだ、と主張しています。これがわれわれの「牛肉麵」です。「戦士授田証」[大陸反攻成功時に大陸の故郷の土地を分配するとして兵士に与えた証書。

老境に達した元兵士から現金その他の台湾での生活保証に兌換せよとの要求が出ている」の兌換、国連再加盟、国際社会復帰、どれもこれもわれわれの「牛肉麵」です。われわれ民進党の綱領では、労働省の設置を謳っていますが、あなたがたはこの一杯の「牛肉麵」を持って行って「勞工局」にしようとしているではありませんか〔86年12月蔣経国総統の指示で内政部勞工司が勞工局に格上げされることになり、後にさらに省級の勞工委員会が設置されることになった〕。

今日、統一というものが多くの中国人の迫及する理想になっています。たくさんの中国人がこの理想のために奮闘していることにわたしは敬意を払います。しかし、わたしが強調しておきたいのは、統一は諸刃の剣だということです。人も切れば、自分をも傷つけることがあります。もし自分の力が人より弱ければ、もし十分な国力が持てなければ、主権国家としての地位が獲得できなければ、結局は自分から統一するのでなくで、人に統一されてしまいます。

最後にもう一度わたしの結論を述べておきましょう。わたしは、現在の台湾海峡兩岸の政府は両方とも統一を語る資格はない、ともに中国の政權を争奪する資格はないと考えます。現在かれらがすべきなのは、政治改革を促進することであり、真に海峡兩岸の人民の為に福利を謀り、人民の生活を改善することです。ひとつの国家としての国格を勝ち取り、ひとつの国家としての名譽を勝ち取り、国民としてのわれわれの尊厳と安全を勝ち取ることです。もし、これらの基本的な改革すら為しえないのに、統一を高唱するというのは、実際上は、統一を口実に既得權益を守ろうとするものではありませんか、統一を口実に人民の政治的權利を剝奪しようとするにすぎないではありませんか。台湾問題と中国の前途を解決するいかなる提案も、われわれ1900万人民の願望を、權利を、利益を無視するものであってはなりません。1900

万の意思こそが台湾の前途を決定する最終的根拠でなければなりません。以上がわたしの主張であり理念であります。ありがとうございました。

＜趙少康＞

司会者、御列席の皆さん。

まず、本日の主催者『聯合月刊』がこのような機会をあたえて下さったことに感謝いたします。わたしは真理というものは、弁ずれば弁ずるほどに明らかになるものだと確信しています。謝議員はわたくしの尊敬する同僚であります。謝議員は議員の職責の各方面にわたってたいへん熱心であり、また非常に理性的な方であります。最初にわたしはかれがさきほど提出したいくつかの問題に答えておきたいと思います。

わたしは、民主が台湾の前途をうらなう重要な要素だと申しました。しかし、わたしはわれわれが国際社会に参加すべきでないなどとは言っておりません。皆さんはわたしの見解をご承知頂いていると存じますが、わたしは一貫して弾力外交ということを主張しています。つまり、われわれは理想をもたなければならない、しかし、われわれは同時にフレキシブルであってかまわない。われわれは理想を放棄することは出来ない、もし、ひとつの国家が、政治家が理想までも放棄してしまったら、それで国家といえるのでしょうか、政治家といえるのでしょうか、それでも政府だといえるのでしょうか。理想はわれわれは堅持しなければならないのです。われわれにはわれわれの目標があります。しかし、やり方はフレキシブルであってかまわない。つまり、こわがってはいけない、多少は不満でもわれわれは国際組織に出て行って、中共と競争すべきです。競争して、いったいどちらが民主的なのか、どちらが進歩しているのか、みんなに見てもらうのです。国際社会のそれぞれの場所で中共と競争すべきです。これはわたしの一貫した主張です。この点誤解のないようお願いします。

さて、[統一実現までに]どれだけ待たなければいけないか、という問題です。先ほど申しましたように、歴史の上では、3, 40年は短い時間です。一部の友人の皆さんは今焦りすぎているのではないですか。確かにひとりひとりの個人からすればあせるのも道理でしょう。時間の過ぎるのは早いものです。しかし、今わたしが申しましたように、歴史から見なければいけない、国家全体というものを見なければいけない。今日、わたしは10時にこの討論会に出てくる前に、9時に教会の葬礼ミサに出席しました。人の一生は短いものだな、と深い感慨を覚えました。しかし、個人の一生は短くとも、国家の命、歴史の生命を考えるべきです。わたしは、政治家というものはこういう抱負を持たねばならないと思います。

謝長廷議員の今日の論点は、もしわれわれが独立すれば、自決すれば、国際社会に再復帰できる、というものです。本当にそううまくいくのなら、実に結構なことです。われわれが国連に加入でき、米国も、日本もわれわれを承認する、これはもう国際社会ではたいへんなことで、国際的強国の一つになったのも同然です。本当にそううまくいくのなら、わたしも賛成です。しかし、問題は可能かどうかです。考えて、よく考えてみて下さい。[このような]可能性のない事をやる勇気がありますか。国家の前途をこのような冒険に賭けていいのですか。この点をわたしは皆さんに重々考慮していただきたい。

今日、謝議員は、今日真に中国の前途を決定するのは[台湾の]1900万人の運命である、と主張しました。わたしもちろん賛成です。わたしもその[1900万人の]一員です、今日来ていらっしゃる皆さんも、その一員です。皆さんはおうちにお帰りになって、考えるかもしれません、いったい全体、独立というのは本当に謝議員が言ったように、いいところがあるのだろうか。もし、あるとしたら、だれもが賛成すると思います。しかし、

可能なのでしょうか。可能でないとすれば、これは空想にすぎません。[そういう冒険を実行して]1900万人の生命、財産、安全が犠牲にされたとしたら、われわれはそういう代価を払いたいと思うのでしょうか。わたしは、強調したい、われわれは今日そんなところまで来ているのでしょうか、こんな危険を犯さねばならぬところまで来ているのでしょうか。皆さん、よくお考え願います。

今さっき、謝議員は、われわれの今日の努力はみんな無駄だ、中共の為にやっていることだ、と言いましたが、こういう言い方は1900万人に対する侮辱だと思います。どうして無駄なのですか。われわれの今日の生活、われわれの社会制度、政治制度、教育は無駄なのですか。国際的にはどう見られていますか。われわれ自身がどう見るかということも重要ですが、米国だってわれわれ台湾が中共の為にやっているなどとは見ていません。日本もそうです。謝議員はどうしてそういう見方になるのでしょうか、わたしには不合理に見えます。わたしの知っているたくさんの米国の友人たちもそうは見えていません。かれらは別に、君たち中共の為にやっているなどとは言ったりしません。これは、謝議員が自分で言っていることで、米国や日本が言っていることではありません。ですから、混乱させないよう、お願いします。

国民党の多くの改革はたくさんの人々の努力の結果だ、と謝議員は述べました。わたしは、両方あるのだと思います。国民党の改革は、国家全体、社会全体の進歩が一定のところまで達したことが推進力になっているのです。この点は謝議員も同意されると思います。つまり、今日民進党の友人であれ、党外の友人であれ、国民党を刺激して改革させようとしています、これは国民党が主要なる政党であることを証明するものです。つまり、わたしがいうように、中国と台湾の前途は国民党の先鋭なる改革にかかっている、ということで、これは互いに認めていることだと言えます。

わたしはかねがね政治は「一党独大」ではいけない、と主張してきました。今日の台湾が進歩していくためには、やはり反対党があって、皆が競争していく必要があります。これらの点はわたしは基本的に承認しているのです。政府が政党結成禁止を解除し戒厳令を解除していくなら、国民党は主導的政党から競争的政党になっていかなければなりません。わたしはいつも言っているのですが、これは〔国民党にとって〕悪いことではないのです。皆さんご承知のように、競争があってこそ進歩があります、絶対的権力は絶対的に腐敗します。今日、民進党、野党に対して希望したいのですが、一個の政治団体、政治家というものの最高の道徳とは何でしょうか。国家の生存ではありませんか。人の個々人の道徳的基準というものは一様ではないかもしれません。一人の男が三人の女性をもっていたら不道徳だという人もいれば、かまわないという人もいるでしょう。しかし、世界中の社会学者、政治学者がいうところの政治道徳、国家の道徳は一つしかありません、つまり国家の生存です。今日の政治競争の下で皆が如何に争おうとも、国家の生存が最も重要なものです。ですから、わたしは、われわれの政治家たちがこのような観点、このような胸襟を持ってもらいたい、明るい太陽の下に立ってもらいたい、コソコソ陰に隠れてはしくない、と思うのであります。

親愛なる友人の皆さん。もう一度言わせて下さい。今日、われわれの国家は、戦時にあるとは言えませんが、しかし、完全に平常な常態にあるわけでもありません。国家を民主の道に進進させること、これもわれわれの国家に前途を開く唯一の方式です。今日、われわれは何をもって、中共と競争したらいいか。われわれの土地はあんなに大きくありません。資源も比較になりません。われわれが唯一競えるのは、さきほど申しましたように、われわれの生活方式であり、経済制度であり、政治制度であります。自由を愛する全ての中国人、

中国の前途に関心を持つ中国人、その全てが希望は台湾にある、と言うようにしなければなりません。また、西側の諸国にも、われわれの台湾地区の民主はますます前進しておりかれらとともに同じ陣営にある、ということを知ってもらわねばなりません。このようにしてのみ、台湾の前途は開けるのです。したがって、いっそうの民主化ということでは、わたしと謝議員とでは基本的に一致しています。御来場の皆さんも同じだと思います。ただ、われわれが民主化を追及するのは、もとよりいいことなのだけれども、その過程で逸脱現象があってはならない、逸脱現象は危険です。全ての政治家が、民衆が、道徳と知恵でもって、民主化を推進する過程での逸脱現象、それによる社会不安というものを避けていかなければなりません。われわれの力は相互に打ち消しあってはなりません。今日、国民党であれ民進党であれ、その他の党であれ、無党派であれ、互いの力を打ち消しあってはならないと思います。

謝議員は、さきほど申しましたが、わたしがたいへん尊敬する政治家であります。今回の選挙〔86年12月の国会選挙〕で、かれは国語〔中国普通語〕で演説しました。平生かれは温和であり理性的であります。最近かれはすくなく排斥を受けているようですが〔87年1月の監察委員選挙をめぐる民進党台北市市議会議員間の紛糾を指す。謝長廷は党の決議に従い同選挙のボイコットを推進しようとしたが、決議に従わなかった他の同党議員と軋轢が生じた〕、わたしは彼のために切齒扼腕するものであります。まあ、かれ本人はなんにも意に介しないのかもしれませんが。わたしは、謝議員が温和な理性的な路線を堅持していただきたい、〔そうすれば〕やはり多くの民衆の支持がえられるものと思います。今日われわれがこのように討論しあったことが、将来の民主のために、将来の政治競争のために好いモデルとなるよう希望します。われわれは、ともに民主に対してささや

かな貢献をしたいと願っています。もし謝議員がこのような路線を堅持されるなら、われわれの考えかたはますます近づきます。ですから、結論に入る前に、わたしはもう一度強調しておきたい。われわれはもっと多くの民主を必要としているだけではありません。もっと好い、もっとすぐれた民主を必要としています。台湾地区が民主を実施してまだ38年にしかありません。実際のところまだよちよち歩きです。どのようにこの過程を克服していくのか、どのようにしてもっと多くのもっとすぐれた民主を獲得していくのか、これがたいへんに重要なのです。

親愛なる友人の皆さん。時間がまいりました。

簡単に結論を申し述べます。

わたしは、再度強調したい、中国の前途は台湾にかかっており、台湾の前途は中国にかかっている、中国と台湾の前途は中国国民党の先鋭なる改革にかかっている、台湾の継続的民主化にかかっている、全ての人々が知恵をだしあってわれわれの国家をより民主的により多元的で開放的にするために協力しあえるか否かにかかっている。われわれ知識分子のひとりひとり、政治家のひとりひとりの任務は重く道は遠い、と言わなければなりません。われわれは胸襟を開き、広い視野を持ち、皆協力しあいわれわれの苦難の中国の前途のために努力しようではありませんか。

今天 語録

中国タクシー事情

外国を訪問して一番接触するのはその国のタクシーの運転手さんではないだろうか。職業柄けっこう見聞は広いし、なによりもその国の庶民の立場でいろいろの話をしてくれるのが嬉しい。

中国もその例外ではない。様々な運転手から、街の最新ニュース、社会事情、経済情勢を聞くことが出来る。上海の個人タクシーの運転手はルーマニア製のミニカーを買い込んで、月2000元も純益を上げていると張り切っていた。「だが、とにかく今の政策が変わらないかが心配だ」。彼は問わず語りに庶民の胸の内にわだかまっている「怕変」（経済自由化政策が変わることへの心配）の存在を裏付けてくれた。

対向してくるタクシーの運転手がこちらを見ながら首を振ると、こちらのタクシーのスピードが急に落ちた。「どうした」、「あっちでスピード取締をやっているのさ」。こんなことは日本から行った私にはよく分かるし、いずこも同じと微笑が沸いてくる。「日本ではネズミ捕り、と言うの

さ」、「そりゃいいや、みんなに教えてやろう」。

深夜到北京飯店から友誼賓館へ。倍の値段を吹かけて来たので、にこやかに話し合う。「昼間の仕事なら単位（職場）が精算してくれるが、いまは自分で払うのだからもっと安くして貰わねば」、「自分で払うんじゃ大変だ。5割り増しでどうだ」、「それでも高い。2割り増しに日本のタバコ1箱でいいだろう」、「いいよ、いいよ。なにしろこのごろは物価高なので」、「まったくだね」。友好的かつ率直な話し合いとなる。

そんな中で一つの話題。「日本人は金持ちのくせにケチだ」。話題は借款か対中投資の不足かと緊張する。「どうしてケチだい」、「チップをくれないのさ」、「いや、それは日本ではチップの習慣がないし、中国は社会主義国だからチップなどあげたら失礼だと思っているのさ」、「そりゃ困る。ほかの外人はよくくれるんだがな」。とんだ話になった。（ツ）